

わたしでいき 面接の手順

岡田 隆介

児童精神科医

1 . 面接の入り口 ジョイニング

わたしは、広島市こども療育センターというところで子どもの精神科診療をしています。わたしの外来でもっとも多い相談は「障害」に関するものです。なかでも、発達障害に関連する相談は増加の一途をたどっています。以前は「学校不適應」やそれに関連した「いじめ」「乱暴」「ひきこもり」が中心だったのですが、最近はかなり減っています。初診・再診の予約が1～2ヶ月先になる精神科より、教育相談のほうが身近で充実しているせいではないかと思えます。このほか、児童相談所と連携して行う虐待関連相談・児童養護施設支援もあります。

こうしたなかで、どのような相談であっても援助を求めている人（以下、クライアント）は“不安・戸惑い”と“怒り・憤り”と“これまでの解決努力”と“相談ごとの自分なりの解釈（自説）”を抱えて来談することに気付かされます。通常、この四つ組みの主役は不安・戸惑いです。「この先、どうなるのだろう」といった先行きの不安だけでなく、担当者や相談のすすめ方への不安も大きいでしょう。

DV・虐待・非行・いじめ被害等では、「どうして自分がこんな目にあわなければならないのか」「のせいでこんなことになった」という怒り・憤りが

主役になることもあります。ですがよく聴いてみると、“怒り・憤り”も根っこの部分では“不安・戸惑い”とつながっており、表現の仕方が違うだけかもしれません。

四つ組みの残る二つ、解決努力と自説もしっかりくっついていきます。ほぼ例外なく、クライアントは援助を求めるまでに自分なりの解決努力を重ねていますが、それは自説をもとに組み立てられたものです。現在の無効な解決努力を効果的な別の策に変えようとして助言や指導をしても、すんなりと応じてもらえないのはそのせいです。解決努力は自説とセットで考えることを忘れてはいけません。

というわけで、クライアントの自説を聞かせてもらうことが重要な作業になります。ほとんどのクライアントは、援助者が自分の説に同意しそれに沿った解決策を示してくれるものと信じ、一刻も早く自説を聞いてほしいと願っています。ですが、クライアントの期待通りに自説を受け入れては新しい解決策につながっていきません（自説と解決努力はセットですから）。「新しい酒は新しい皮袋に」ということにはなりますが、自説はクライアントの拠り所ですからそう簡単に手放すことはできません。そんなわけで、クライアントの説明の聴き方と扱いが対人援助のキモとなります。

そのために、まず援助者はクライアントの不安・戸惑い、怒り・憤りをしっかり受け止めなければな

りません。その上で、解決努力をきちんとねざらいます。ジョイニングです。そうすることではじめて、過去から続く痛みをいまの苦しみに繋げた自説を「額縁（枠）に入れた絵物語」のように語ってくれます。その際、絵だけでなくそれを成立させている枠を見逃さないことが重要です。この枠は絵を引き立てるためのものではなく、そこに絵のテーマ（クライアントの生きる枠）が表わされているからです。

2 . 身体の相談の場合

四つ組みは、身体の相談でも同じです。たとえば、全身倦怠感がひどくて受診する場合、「入院を要するような病気だったらどうしよう」という不安・戸惑いと、「ずっと忙しくて過労気味だったせいに違いない」という自説と「ストレス解消、栄養摂取に気を配った」とする解決努力があるでしょう。

普通はうまく抑え込んでいますが、「よりによってどうしてこの時期に自分が」の怒り・憤りもあるはずです。患者さんはきっと「ずっと仕事が忙しく、無理をし続けたために疲労が蓄積し、ついに体調を崩すに至った」という絵を描き、その周囲には「会社も家庭も、自分が頑張らないとダメになる」という枠を持っているでしょう。それは、彼の体調のみならず生き方も縛っている枠組みのはずです。

医師は患者さんの話をひと通り聞いた後に、必要な検査を実施して診断を告げます。このとき、患者さんの自説と医師による「肝機能障害」という診断は一致しませんが、医師は「ただの疲れ」説をきっぱり否定します。自説を置き換えられた患者さんも、抵抗することなく受け入れるでしょう。それは科学的根拠を持つ専門家の見解だからです。医学援助モデルでは、サービスを提供する側と受ける側との間に実に潔い線が引かれています。

ただあえて言えば、「自分がいなければ～」の枠は基本的に手つかずです。もしも再発するとしたら、このあたりが問題になるかもしれません。

3 . 心の相談の場合

近隣住民からの通報で始まる虐待相談を例に考えてみましょう。この場合、主役は怒りです。家族はまず通告者への憤りを、ついで当の子どもへの怒りを表わします。それにていねいに耳を傾けていると、やがて暮らしむきの不安や子育ての混乱等を少しずつ口にします。怒りの受け止め・不安の受け入れ・解決努力のねざらいをしっかり行うことで、やっとクライアントの絵物語を聞くことができます。

よくあるのは「子どもの問題を解決するために手をあげた。学校や福祉があてにできないから、自分たちがこうやって努力している。それを責めるとはどうか。これは躰であり、親の義務である。殴るのは言うことを聞かないからであり、自分だってそうやって育てられてきた」という絵です。自説が解決努力を支え、結果的に虐待が持続するという構造になっています。

専門機関は「親自身の被虐待体験がその性格形成に影を落とし、虐待行為に結びついている」とか、「社会的な孤立や経済的な脆弱さが育児の混乱をより大きくしている」みたいな解釈をしますが、医学モデルと違ってその絵に家族を納得させて新たな対応へと導く力はさほど強くありません。ときには援助の手が同時に追及の手でもあったりして、両者の絵と枠組みは真っ向からぶつかります。心の領域では、専門性と当事者性は基本的に対等のように思われま

す。では、心の相談における専門性とはいったい何でしょう。わたしは、「言葉を介して相互に影響し合う関係のなかで、新しいものを生み出せること」だと思っています。まさに、科学的に証明できないという心の領域の弱みを強みに変えられる専門性です。ここでは、絵物語や枠組みを動かすのは科学ではなく言葉（による相互作用）なのです。

4 . 手立て

～クライアントの絵物語とその枠～

家族システムと同様に、援助の場にもシステムはあります。援助面接は、絵物語と枠をはさんだクライアントと援助者の相互作用によって展開します。クライアントと援助者がどのような語りをするか、

それによって援助の道筋は次のように分かります。

「*が問題*」とするクライアントの絵を援助者の枠で「*が問題*」とし、具体的に明日を語ってみせる。

ジョイニングがじゅうぶんになされた後、『わたしは、*でなく*××が問題だと思います』「ちょっと待って！それ、どういうこと？」というやりとりをします。この場合、援助者の『なぜなら～』以降がクライアントの腑に落ちなければ、相談が途切れることになりかねません。

これはクライアントの予想を超えた展開で、当然、緊張が高まります。とはいえ、問題と指摘した××がクライアントの興味や好奇心を呼び起こせば、高まっていた緊張は弛緩していきます。

「産まなきゃよかった。怒ったらいつも黙ってうつむくだけで、返事もしない。それで手が出てしまう。別の時に問いただすと、どうせ自分は要らない子だからとしか言わない。ほんと、憎たらしい。あの子は、生まれながら性格がゆがんでいる」

『そうでしたか、性格のせいだとずっと悩んでおられたのですか。性格が原因なら、根深い気がしますものね。でもね、こんなことを言ってもすぐには納得していただけないかもしれませんが、問題は彼の性格ではないと思います。いやもちろん、子育ての責任でもありません。これは心理テストにもでているのですが、実は彼の情報の受け方、処理の仕方は独特なんです。

たとえばね、先日のことは「いい加減にしなさいよ」から始まったじゃないですか。でも彼はね、この“いい加減”という意味がわからない。何をどうしてほしい、そう具体的に言われないとわからないんです。普通なら、意味はわからなくても雰囲気や察知しますよね。ところが、いわゆる空気なるものを読む力も弱いんです。

というのはね、一つのことを注意が向くとそれ以外が自動的に遮断されるんです。お母さんの「いい加減にしなさいよ」に意識が向くと、表情や空気や伝わるべきものが遮断されてしまうんでしょう。それで結局、場にそぐわない態度をとってしまうんです。

TVゲームしてる時もこの遮断が起きるから、お母さんの言葉を完全に無視し、叩かれて始めて気付くなんてことが起きます。

それから、言葉で言われたことを頭の中でムービーのように映像化して理解することが苦手です。それで先のイメージが持てず、言われていることの全体像が理解できません。ちょっと考えたらわかりそうな結末さえも予測できず、お母さんから見たらわざわざとしか思えないようなミスをやってしまうわけです。

また体の感覚も独特で、先日トイレを失敗して、叱られる前にパニックになったでしょ。あれは、自分の尿の生暖かさに耐えられなかったのだと考えられます。不思議でしょう？

さぞかし、たいへんな子育てだったことしょうね。戸惑いの連続だったに違いないと思います。ですが、彼にとっても世の中の仕組みはわかりにくいものなんです。実は、こういった特徴を前提とした子育てのコツを集めたものがあるのですが、いっしょに試してみませんか』

母親の絵の根底にあるのは、「この子が問題」です。また母親は、親や姉妹、つきあっている男性、前夫、近隣との薄い関係の中で安心・安全を感じて生きてきました。つまり、それが母親の枠組みです。ところが、子育てはそんな距離ではできません。それでもがき苦しんでいる、わたしはそう読み取りました。

この絵物語を「子ども（の性格）が問題」というベースで突き進むのは、正直キツイです。そこで子どもに備わっている「特質」に注目し、専門家然としてこちらの枠を持ち込みました。子どもに生まれながら発達障害的な特徴があったのか、あるいは虐待環境の中で発達に偏りが生まれたのか、それはわからないし、いまはどちらでもいいです。ねらいは、他人の援助を必要とする問題によって、家族の相互作用が変わることにあります。

この枠が母親の腑に落ちれば、新しい子育てに関連した心理教育的なプログラムに誘います。この手順を飛ばしてプログラムに誘っても、「*が問題*」が変わらなければ思うような成果は上がりません。

既にある強み・マシ・違いを繋ぐように質問を重ねるところから、クライアント自身が明日を描く

社会への不信・不安が根深く、通報者や近隣住民への怒りが自身の困りごとを凌駕している場合、のように“教える・変える”を軸にした相互作用は生まれにくいです。そこで、逆の“尋ねる・教わる”をやりとりの基本にします。これは中断しにくい対等の関係に近づくことを意味しており、力の上下関係を生きてきたクライアントには未知のコミュニケーションになるかもしれません。

クライアントの絵物語は、自分史に散らばる不運、不幸、許し難い他人、無力な自分などネガティブな点を強調しながら繋いでいます。その選択基準は、まさにクライアントの枠組みです。援助者は、クライアントの絵・枠をじっとながめます。そして数多くの過去の情報から、クライアントの枠から外れて意味を与えられずに見逃された点（エピソード）やクライアントの語りからすれば例外として無視されてきた点に興味をよめます。またいま起きていることの中で、いつもよりいくぶんマシに見える点やこれまでとは少し違って聞こえる点にも注意を向けます。こうした基準をもって集めた情報について、どうしてそんなことができたのか等、それらの間に脈絡が生まれるような質問をするわけです。

クライアント自身がそれらの点に意味を与え、自分の絵物語の中にはめ込んでいくと、「 が問題である」から「なんとか対処できている」へと移っていきます。

たとえば、
「相変わらずですよ。忙しいときに、わざわざ怒らせることをやるものだから手が出てしまう」

『掃除機の柄でポコポコですか・・・』

「いやゲーパンチだったけど」

『柄を使わなかったのは、何かわけがあったのですか。それに蹴りも控えられたんですよね』

『たまたま近くになかったから。蹴りは言われてみるまで気がつかなかった』

「その日は、わざわざ柄を探そうとはしなかったし、足も出なかった。いったい何が違っていたのでしょうか？」

『そんなこと、別に。めんどくさかったからかな』

「いや、それってすごいことじゃないですか。よく子どもの面倒をみるっていうでしょ、つまり子育ては面倒なものなんです。これまで、なんでもかんでもご自分でひっかぶっていたお母さんが、面倒だと思われるなんてすごく大きな変化だと思いますけど」

『そお？面倒っていいこと？』

「そう思います。面倒だと少し距離を置くでしょ。そうなれば、余裕ができて（＝母親が得意とする距離）子どものことが見えてくると思います。面倒こそが、楽な子育ての入り口じゃないでしょうか。そんな気持ちになられていたなんて、実に驚きました。それって意識的に工夫されたことですか。それとも心境の変化ですか」

『別に、思い当たることはないけど』

「じゃあ、今後、カチンとくる場面にぶちあたったら、なんでここで掃除機の柄を探さないんだとか、なんでしかり飛ばすことが面倒なんだろって、その場で観察してもらえませんか？それこそ面倒かもしれないけど、ぜひ教わりたいんです」

『はあ、まあやってみるけど。なんか、先生の言うことを真に受けたら、このままでいいかもって思ってしまう』

「ほんとですか、実はわたしも、最近、同じことを思ってるんですよ」

『もうひとつ、先生。あの子のこだわりはなんかなるもの？気に入ると手放さないし、気に入らなければ受け付けない、もうあきれほど頑固で』

「はい。でも、そのこだわりは反抗とは別物で、わがままとも違うんですよ。それは、子どもさん自身もどうにもできないものなんです。当面、こだわりは指導の対象にしないことにしましょう、危ないことでない限り。将来的には、むしろそのこだわりを生かす方向を考えればいいと思います」

5 . 二つの道筋

の「クライアントが を問題と語る枠組みを、援助者が別の枠組みで が問題と語る」は、援助者のデザインにそった心理教育的な変える面接と言えます。

1) 変化や解決以前に、まずクライアントをエンパワー(「来てよかった」「聴いてもらってよかった」「気分が楽になった」)。

2) そのために、家族の語りから家族の強み(リソース、既に起きてる変化等)にこだわる。

3) そこから、クライアント自身、クライアントの過去・家族、世間に対する肯定感をベースにした相互性が生まれる。

クライアントが訴える表の主訴以外に裏の主訴があるかもしれないことを念頭に。

1. 概要

児相に紹介されてやってきたのは、現在A男を養育している叔父夫婦だった。一緒に住むようになって半年たったが、「偏食が激しく、嫌いなものを机の下やカーペットの下に隠す」、「腹が立つと、衣類をハサミで切り刻む」、「夕食を残し、夜、冷蔵庫の残り物を漁る」、「家にあるものが気に入ったら平気で盗る」、「目を離すとすぐ店のものを盗り、叱っても平気な顔をしている」、「近所の声をかけてくれる人に、異様に馴れ馴れしくする」、「小動物いじめをする」、「相手に無関係に、一方的にしゃべり続ける」、「叱られているときに、ニヤッと笑う」、「注意されたことをすぐ繰り返す」等で困っているという相談であった。

叔父夫婦は、父親に殴られ母親に見捨てられ、施設で十分な躰をされていないA男に、責任をもって躰をしようとしてきた。にもかかわらずA男の行動はますますひどくなっており、これをどのように理解したらいいかを知りたいということであった。

叔母は、夫の異父妹の気の毒な子どもということで、5歳の頃から施設からの外泊を引き受けていたのだが、当時から子どもらしい生き生きした感情表現が少なく、なにかを共感しあうことが難しかったと振り返る。

A男は横で話を聞きながら、叔父叔母から確認を求められるたびに黙ってうなずいていた。問うと叔父夫婦のことが大好きと答え、無邪気にずっとこの家で暮らしたいと言う。ここでの話が自分の行く末に関わっていることはまったく理解できていないようで、それがまた叔父夫婦を困惑させていた。

学校からの情報では、A男が父親からの暴力や母親に見捨てられたことをよく口にする、特別支

援教育の対象で校内では特に問題がないことがわかった。

2. A男の生育史

実母は心臓が弱く、高校卒業後一人で生活していたが、40歳を過ぎて同じ高校の同級生だった実父と出会い、同棲し、妊娠して結婚。42歳の時にA男を生んだ。実父はアルコール依存のうえ就労が不安定で、結婚当初よりDVがあった。A男は乳児期から罵声を浴び、幼児期には身体的暴力を受けていた。やがて、毎日のように母子に暴力をふるうようになったため、母親は5歳のA男を連れて家を出た。友人宅に身を寄せたものの、その翌日、母親は何も言わず行方をくらませた。

その友人から連絡を受け、児相はA男を保護した。母親とは連絡が取れず、父親の同意によりA男は児童養護施設に措置された(後に離婚し、親権者は母親となる)。施設では、他児の食べ物を勝手に食べたり自分の持ち物以外でも無断で使うということが頻発した。注意されると逆ギレしパニック状態になるということで、施設は処遇に困っていた。

入所して2年たち少し落ち着いてきた頃、それまで面会や外泊をしていた実母の異父兄夫婦が実母を伴って児相を訪れ、A男を引き取りたいと申し出た。児相は状況を調査し、措置を解除した。

なお本児は、知的には境界域で学力は低かった。

(C) 面接の指針

児童相談所の紹介で、叔父夫婦がA男といっしょにやってきた。退職後は農業をしており、実子はいない。将来的にはA男と養子縁組をして跡継ぎにするつもりで、実母も了解しているとのことであった。

叔父は、A男の行動を理解したい、それがわからないと心も通じないと訴える。叔母は、虐待を受けて育ったり施設で大きくなったりしたことが原因なのか、躰不足だと思って厳しく接してきたことが間違いだったのかと尋ねる。そしてA男に、「わざとおじさんたちを困らせよう、怒らせようとしているのか?」と問いただす。A男は、意味がわからないといった表情で反応しない。

叔父夫婦の仮説は、「A男と心が通じ合っていないのは、虐待生活や施設生活による躰不足とA男を十

分に理解できていないことが原因だ」であった。この仮説の根幹をなしているのは、A男の行動が「わざと」という受け止めである。この「わざと」を否定すると、理解に到達することは困難になると感じた。そこで、わざとをメタファーでくるで言い換えてみた。

T h「唐突な質問なんですけど、お風呂にどんな入り方をされますか？ボクは胸の辺りまで少しぬるめのお湯を張って、ゆったり入るのが好きなんですけど」
叔母「同じですね、わたしたち、血圧が高いと言われているので・・・」

T h「近頃は、だいたいみなさん、そうされますね。それが一番気持ちいいですものね。ところが、みんなそうかと言ったらそんなことはありません。たとえば、A男くんなんか、全然違います」

叔母「え？A男の入浴をご存じなんですか？」

T h「いえ、すみません。普段の生活をお風呂にたとえた話なんですけど、A男くんは“わざわざ熱いお湯、または思いっきり冷たい水を、口のすぐ下まで張って入っている”じゃないかと思われるのです。われわれ流の風呂なんて、ぬるくて何も感じないんじゃないでしょうか。熱過ぎたり冷た過ぎる刺激、呼吸が苦しくなるほどの圧迫感、それがないと入った気がしないわけですよ、言ってみれば。つまり、彼は風呂に緊張の緩和ではなく緊張の高まりを求めているのじゃないかと」

叔父「それは、生活の刺激ってことですか？」

T h「その通りです。彼は、わざとお風呂に服を着たままで入ってる。いや、鎧と言った方がいいかな。ですから、強烈な熱さや冷たさでも肌に達する頃にはちょうどいいぬるさになってるのでしょうかね」

叔母「虐待を受けたら、鎧でもまとわないととても耐えられなかったでしょうね」

T h「おっしゃるとおりです。鎧のおかげで家でも施設でも生きてこれたんでしょう。そしてそれを、まだ手放せないわけです。いまま脱いでませんよね。日々の注意・叱責・トラブルは、言ってみれば熱湯であり氷水なわけです。それを、わざわざ口の高さまで満たしている」

叔父「つまり、わざと叱られることをするのは、そういう刺激しか心に到達しないから、ですか??」

T h「わたしにはそう見えるんです。どうしたらわ

ざとアップアップするまでお湯をはるようなことをしなくなるかが問題なのではなく、どうやったら鎧を脱いで生きていくか、それがポイントではないでしょうか。いや、でも、ほんとにいまも常に鎧を着ているのかなあ。もしかしたら、そっと脱いでいる時間もあるのかもしれない。いかがですか？」

叔父「それは、ぬるいお湯を味わっているときがあるはずだと言う意味ですか？」

T h「そうですね。目立たないかもしれないけど、日々の何気ない普通の出来事を味わっている瞬間、ないですかね？」

叔母「何気ない普通ですか・・・」

T h「ええ、一人でなにげなく過ごしているときとか・・・」

叔父「熱湯ばかり見ていたので、そんなこと思いもしてませんでした。探してみます」

・・・・・・・・・・・・・・・・

T h「子どもらしい生き生きとした感情が感じられない、とおっしゃってましたよね？」

叔母「そうなんです。ほめられても怒られても、なんか淡々としているんですよ。子どもらしくないというか。ほら、いまもそんな感じでしょ」

T h「歓びと悦び、哀しみと悲しみ、怒りと憤り、楽しみと愉しみ、照れと恥じらい、誇りと自慢、こんなものを表現しきるには24色の色鉛筆でも足りないかもしれないですよ。でも彼の幼児期の生活は、恐怖と怒りが“有るか無いか”の世界でしたでしょうから、白黒2色しか使わなかったんじゃないでしょうか。“生き生きとした色彩”なんて意味がわからないでしょ」

叔母「必要なかったということですか・・・」

T h「さきほど淡々としているとおっしゃいましたが、それは白黒以外の色使いじゃないですか。淡い水色くらいかな。少なくとも水墨画のような枯れた世界とは違いますよね」

叔母「なるほど、じゃあ、私に叱られて黙ってうつむいているときなんかは赤ですか？」

T h「たしかに。じゃあ、ぬるいお湯につかっているときなんかは、何色でしょう？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

叔母「この先、叱ってはいけません。そういうことなんでしょうか？」

T h 「いいえ、ちょっと違います。保護者として譲れない線というのは、やっぱりあると思います。その線引きを考えてみましょう。法律違反と自分や他人を傷けること、これは絶対に譲れませんね、線の内側です」

叔父「ええ、そうですね」

T h 「次に不適切な行為、たとえばマナー違反とか常識に反する行いですが、これは微妙です。わたしとしては、これは線の外側に置けないかと」

叔父「でも、わたしらはそれが見逃せなくて・・・」

T h 「いえ、見逃すのではなく、逆に見てあげないのです。熱湯や氷水を口の高さまではるという話をしましたよね、わざわざそんなことをするのは、基本的に見せる、見てもらうための行為で、気づいてもらって初めて両者の間に緊張が高まるわけです。それを見てあげないのは、不適切な行動を認めたことにはならないし、彼の作戦にのったことにもなりません」

叔父「わざとのし甲斐がないということですか。仮に見ないようにしたらどうなりますか？」

T h 「とりあえず、もっとがんばって見せようとするでしょうね。でもね、他の場面を見ていたら、“何だ、そういうことか”と。つまり、わざわざお湯をいっぱいにしなくても、胸の高さのぬるめのお湯を見てくれるのなら、それでじゅうぶんじゃないかと。つまり、日々の何気ない普通の出来事でやりとりをするわけです。緊張感のある生活よりも緩い生活で付き合っていくってことなんです」

叔父「さっき言われた不適切な行為というのが、あの子の風呂の入り方だということですか」

T h 「はい。まさにその通りです」

・・・・・・・・・・

叔父「私らは、何をめざして育てればいいのでしょうか？」

T h 「私は、A男くんがこの家において、自分がどれほど役に立っているか、自分がどのくらい当役にされているか、を実感できるということだと思います。彼が生家や施設で手にすることができなかったのは、まさにこれだと思うんですね。信頼感とか安全感は、こうした貢献感を手にすることから生まれると思います」

面接は、A男の理解、生き生きとした感情交流、今後の目標に関する家族の疑問に答えてほしいという流れである。だが、求められるまま家族の考えに上書きしても、おそらくそれは受け入れてもらえない。そこで、援助者のメタファーでくるんだ答えを提供した。そうすると、あとは心理教育的にこちらのペースで面接は運ばれていった。